

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム(2018)第18巻:

ff% L' % - %fl ' L

旭川医科大学回顧資料 (19) 1991 (平成3) 年度

下田晶久学長の退任と清水哲也学長の就任

平成3年(1991)度の出来事を、今回は国内外に分けず、単純に時系列的に振り返ってみよう。

年度初めの4月1日に東京都庁が千代田区丸の内から新宿区西新宿に移転し、新東京都庁舎が開庁した。同日、日本初の衛星放送局 WOWOW が本放送を開始した。また同日、牛肉とオレンジの輸入の自由化が開始された。当初は日本の農家や酪農家にとっては大打撃であるとの観測もあったが、以降、さほどの混乱もなく推移した。26日には海上自衛隊のペルシャ湾掃海派遣部隊が出発した。自衛隊初の海外派遣である。

5月8日には「育児休業法」が成立し、女性にとって働きやすい職場環境の構築にとっては画期的な前進となった。14日には信楽高原鐵道信楽線で同社の普通列車と JR 西日本の臨時快速列車との列車衝突事故が発生し、42人が死亡するという大惨事となった。同日、大相撲の横綱・千代の富士が通算1045勝という記録を残して現役を引退した。31日には、ダンスホール的一种ディスコティーク(ディスコ)のジュリアナ東京が東京都港区芝浦にオープンし、ここはのちにバブル経済の象徴として語り伝えられることになるが、じつは、この時期には既にバブルは崩壊してきていた。

6月3日、長崎県の雲仙普賢岳で火砕流が発生し、死者・行方不明者は43人となった。20日には東北新幹線の上野駅・東京駅間が開業し、東京駅から岩手県の盛岡駅までが結ばれたが、新青森駅まで全通したのは2010年のことである。同日、バブル崩壊に伴う4大証券会社(野村・大和・日興・山一)の大口投資家への損失補てんが発覚し、一般投資家の証券会社に対する不信は頂点に達した。

7月11日には、『悪魔の詩』を翻訳した筑波大学教授が大学内で殺害された。この本にはイスラム教を冒瀆するような内容が含まれていた。同31日、統一地方選挙で日本社会党が惨敗した責任をとり、土井たか子を委員長とする社会党執行部は退陣した。一時は日本初の女性党首と持て囃され、革新勢力の一部からは女性首相誕生への期待も抱かれたこともあった土井の、見るも無惨な退場であった。

9月9日、アイドルグループ SMAP が CD デビューを果たした。同30日には、朝日新聞朝刊に26年半、8168回にわたって掲載されていたサトウサンペイの4コマ漫画『フジ三太郎』が連載を終了した。同日の最終回では、登場人物全員が「上を向いて歩こう」の替え歌を合唱した。

10月3日には海部俊樹首相が退陣を表明した。与野党双方から突き上げを喰らって政治改革関連法案が国会で審議未了廃案となったことを受けて「重大な決意で臨む」と発言し、これが衆議院の解散を意味する発言であると受け取られたため、自民党内の反海部勢力から大反対の合唱が起こり(「海部おろし」)、退陣を余儀なくされたのであった。同5日には、4月と10月の恒例企画であるTBSの人気クイズ特別番組『オールスター感謝祭』が放送を開始した。これは現在もなお続いている。同7日には、札幌テレビ放送(STV)の夕方のローカル番組『どさんこワイド120』が放送を開始した。これは現在も『どさんこワイド179』のタイトルで継続している。同23日には秋篠宮家の紀子妃が長女(眞子さん)を出産した。同28日、プロ野球日本シリーズで西武が広島に4勝3敗で勝利し、2年連続の日本一に輝いた。

11月1日、日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）が文部省の認可を受けて発足した。同5日には、海部内閣退陣の後を受けて宮澤喜一内閣が発足した。

12月11日、高知県知事選で元NHK記者の橋本大二郎が当選し、戦後生まれで史上初となる知事の誕生となった。同21日、栃木県足利市で女兒2人が誘拐・殺害された事件（足利事件）の容疑者が逮捕され、彼は後日、無期懲役刑が確定して服役していたが、2009（平成21）年5月の再鑑定において遺留物のDNA型が彼のものと一致しないことが判明し、彼は無実の冤罪被害者だったことが明らかとなった。

年が明けて1992（平成4）年の1月5日から、X JAPANが日本人アーティストとして初の東京ドーム3日間公演を行った。

2月13日には、東京地検と警視庁が東京佐川急便の強制捜査に乗り出した（東京佐川急便事件）。自由民主党衆議院議員の金丸信会長が同社の親会社である佐川急便（本社所在地は京都市南区）から5億円のヤミ献金を受領したとされ、彼は10月になって議員辞職に追い込まれた。2月19日、経済企画庁が、日本経済は前年1～3月期をピークにリセッション入りしたと発表した。バブル景気の公式終結宣言である。

3月14日、東海道新幹線で「のぞみ」が運転を開始した。同15日、東京のTBSラジオ・文化放送・ニッポン放送、大坂のMBSラジオ・ABCラジオの計5局がAMステレオ放送を開始した。同25日には長崎県佐世保市にテーマパークのハウステンボスが開業した。

この年度のヒット曲には、尾崎豊「I LOVE YOU」、小田和正「ラブ・ストーリーは突然に」、CHAGE and ASKA「SAY YES」、KAN「愛は勝つ」、槇原敬之「どんなときも。」、小泉今日子「あなたに会えてよかった」などがあつた。

映画界では、邦画のヒット作に、金子修介監督・織田裕二主演の「就職戦線異状なし」、高畑勲監督・スタジオジブリ制作のアニメ「おもひでぽろぽろ」、黒澤明監督・村瀬幸子主演の「八月の狂詩曲」などがあつた。洋画では、「ゴッドファーザー PART III」、「羊たちの沈黙」、「ターミネーター2」などがヒットした。

流行語には、「…じゃあ～りませんか」、「火砕流」、「ひとめぼれ」、「若貴」、「重大な決意」、「損失補填」、「ダンス甲子園」などがあつた。

さて、このように多様な出来事に彩られたこの1991（平成3）年度に、我が旭川医科大学でも、画期的な出来事があつた。第3代の下田晶久学長が病気のため1期（4年）限りで退任されることになり、選挙の結果、清水哲也氏が7月1日付で第4代の学長に就任したことである。

清水哲也氏は1928（昭和3）年に寿都郡寿都町に生まれ、52（昭和27）年に北海道大学医学部を卒業。その後、同大学院医学研究科博士課程、同医学部産婦人科講座助教授、米国ワシントン州立大学医学部留学などを経て、74年（昭和49年）に旭川医科大学医学部教授に就任された。そして91（平成3）年、上述のように旭川医科大学第4代学長に就任され、6年後の97年（平成9年）に2期にわたる任期を満了されて退官し、同名誉教授となられた。専門は産婦人科学。特に、体外受精及び不妊治療の権威で、日本超音波医学会会長、日本受精着床学会会長、日本不妊学会会長等を歴任された。89（平成元）年には北海道で初めて体外受精児の出産を成功させた。

今回は、下田晶久氏の退任挨拶（回顧資料A）と、清水哲也氏の第4代学長就任にあたっての抱負の弁（回顧

資料 B) を紹介しよう。いずれも広報誌「かぐらおか」第 69 号（平成 3 年 9 月 14 日教務部学生課発行）に掲載された文章である。

国立大学が法人化されたのは 2004（平成 16）年 4 月であり、その後、国家財政の逼迫を反映して各大学の教育・研究環境は激変し、競争も加速してきたが、すでに、法人化 13 年前の下田・清水の新旧両学長による文章に、そのことを先取りないしは予言するようなキーワードが多用されていることに、率直な驚きも禁じ得ない。国によってこのころ既に敷かれていたレールの上を、我々は今、好むと好まざるとにかかわらず、ひたすらに走り続けさせられているわけである。

下田第 3 代学長いわく、「予算の効率的な運用」「大学の相対評価に基づく重点配分」「留年率や国家試験合格率」「折々の自己点検」「一般社会への情報提供」など、清水第 4 代学長いわく、「教育革命」「自由で多様な発展」「自らの責任において教育研究の不断の改善」「自己点検・評価のシステムを導入」「授業の履修形態の柔軟化」「自助努力」「民間資金の導入による寄附講座」「国際交流の積極的な展開」「グローバル化の進展」「留学生の受入れ体制の整備」「未曾有の転換期」などである。

＝回顧資料 A＝

退官にあたって

第三代学長 下田 晶久

昭和 62 年 7 月 1 日から平成 3 年 6 月 30 日までの 4 年間にわたる学長の任期を終えて、このたび退官させて戴くことになりました。長くも短くも感じられる 4 年間を振り返る時、何よりも先ず安孫子、鮫島両副学長を始めとする教職員各位の温かい御支援と学生諸君の協力に深く感謝申し上げます。やがて創立 20 周年を迎えようとしている旭川医科大学に起こったこの期間の出来事を思い起こしてみますと、創設期から労苦を分かち合っただけでなく、戴いた 5 名の教授の方々が定年により本学を去られた一方でそれぞれに新進気鋭の後継者を迎え入れる事が出来たこと、入学定員が当初の 100 名に復帰したこと、カリキュラムの大幅な見直しが行われたこと、国立大学全体の入試改革への対応、さらには病院の医療情報システムや図書館の学術情報システムの導入などが浮かんで来ます。これらの目に見える変化の陰に隠れた最大の試練は、強まった国の財政緊縮の直接的な波及を如何にして緩和し本学の活性を維持するかにありました。その為には全学の協調体制が前提となりますが、前述の主な変革はそれが成し遂げられた事自体この全学的な協調が立派に保たれた結果である点を改めて銘記したいと思います。

国の財政を預かる政府の立場では、予算の効率的な運用を図ろうとするのは当然と考えられますが、それが大学の相対評価に基づく重点配分へと傾斜する危険性は常時意識に留めておかなければなりません。ここで問題となるのは教育・研究を第一の使命とする大学の効率とは何か？ またこれを計る正しい物差しを設定し得るか？

であります。医科大学の場合はこれに加えて診療の成果もまた評価の対象となります。しかも診療評価は多角的に為されなければなりません、その中には指数化される要素をも教多く含んでいる為、むしろ第三者からはこの指数のみから安易に評価し勝ちな面があります。これが医科大学全体の評価に繋がる可能性も否定し得ないとするれば、現実を直視した全学的配慮が望まれます。同じことは指数化され易い留年率や国家試験合格率についても言えるのであって、母校の発展が即各自の将来に大きく影響する学生諸君にも奮起を促したいと思います。

甚だ現実的な話題を取り上げてしまいました。既に新設医大の時期を過ぎそれぞれに十分な成果の蓄積が為された本学の全体像に触れる機会を与えられた4年間を顧みて、今後の本学の発展には一層の協調に基づく折々の自己点検が望まれ、さらにその成果の積極的な発言が必要となるであろうとの現在の感想を率直に述べさせて戴きました。この点では「桃李言わざれども下自ずから蹊をなす」と言った価値観に育った年代の一人として、少なくとも一般社会への情報提供に欠ける処は無かったかと深く反省しております。

機会を与えて戴いた7月3日の退官記念講演の折に述べた事柄をもう一度繰り返す事になりますが、自然環境が人間形成に与える影響は決して小さくはないと信じます。大雪・十勝の雄大な山並みを朝な夕なに仰ぎ見るキャンパスには、一年を通じて常に鮮やかな季節感が漲り、ともすれば忘れがちな大自然との対話を思い起こさせてくれます。多感な青年期の6年間をこの恵まれた環境の中で過ごした卒業生諸君の間に自ずと培われるであろう気風が、やがては凝結して気宇壮大な学風となる日の訪れることを夢見ております。最後に旭川医科大学の限り無い発展と皆様方の御健勝を祈念してお別れの言葉と致します。

＝回顧資料B＝

就任にあたって

学長 清水 哲也

下田晶久前学長ご退官の後を受けて、この度、学長に就任することになりました。三代に亙る学長先生が「大学人」の象徴ともいべき立派な方ばかりでありますので、その責の重さをひしひしと感じております。もとより微力ではありますが皆様のご支援をいただきましてこの重責を果たしたいとお願いいたしております。

今、「大学」はまさに明治維新にも似た平成維新ともいべき「教育革命」のさなかにあるといっても過言ではありません。

文部大臣の諮問機関であります大学審議会は三次に亙って答申を行っております。

本答申を仔細に検訂してみますと、もっとも身近なものとして昭和62年10月29日、文部大臣から「大学等における教育研究の高度化、個性化および活性化等のための具体的方策について」の諮問を受けての答申、「平成5年度以降の高等教育の計画的整備について」のなかで下記の3点が持筆されます。

○各大学等が自由で多様な発展を遂げ得るよう、大学等における教育の基本的枠組を定めている大学設置基準等の緒基準を大綱化すること。

○各大学等が自らの責任において教育研究の不断の改善を図ることを促すための自己点検・評価のシステムを導入すること。

○大学等の生涯学習に果たす役割の増大に伴い、大学等における教育へのアクセスの多様化や授業の履修形態の柔軟化を図るなど、多様な学習機会の提供に努めること。

つまりは従来のような国立大学にややもすると見受けられがちな「親方日の丸」的な考え方を完全に否定して、「各大学は自己評価、自己点検を強化して、各大学の特色を出しなさい」、「自助努力をしなさい」というもので、民間資金の導入による寄附講座なども既に他の国立大学で実現をみておりますし、本学でも下田前学長のご努力により民間資金導入による寄附講座等に関する諸規程案が制定され、教授会の承認が得られております。

事実、東大医学部附属医用電子研究施設の臨床医学電子部門や滋賀医大では運用が開始されておりますし、続々と各国立大学で実現化の趨勢にあります。国からの公的助成の促進と同時にこのような側面からの具体的ストラテジー推進も軽視できない自助努力の1つといえましょう。

また大学審議会の答申の重要な柱として学部、大学院を通しての国際交流の積極的な展開を挙げております。

○グローバル化の進展により、我が国の社会は、経済、文化さらに日常生活に至るあらゆる分野において諸外国との交流を前提に成立する社会となっており、高等教育も例外ではない。

○大学院における留学生の教育体制の整備

いまや留学生の受入れ体制の整備は大学院の整備充実の重要な課題になっている。

留学生の受入れの推進に当たっては、我が国の大学院教育全体の改善を図り、大学院を国際的な高い水準の教育研究を行う機関として、事前の準備を含む留学生に配慮した教官体制の整備を図る。

この大学における国際交流に関する推進で思い出されるのが、遼寧省（瀋陽市）にある中国医科大学からの留学生馮戈女医の留学についてのエピソードであります。

中国医大には優秀な医学生を選抜して、英語と日本語で医学教育を行うコースがありますが、「英語コースを終えた卒業生は米国を中心とした英語圏諸国へ留学する機会に恵まれているのですが、日本語コース修了者の日本留学の機会がほとんどないために、中央政府からの財政援助打切りの危機的状況にある、何とかとりあえず2名の日本語コース修了者を旭川医大へ招聘して頂けないか」との依頼が、旧知の中国医大巴景陽教授からありました。

私は取り敢えず1名、3ヶ月間なら何とかなると考え、旭川市の坂東市長と当時の旭川市医師会長原田一民先生を訪ねてご相談申し上げたところ、全面的なご協力をお約束頂き、市民の募金運動のかたちで、報道機関の協力を得て馮戈女医の留学が実現しました。

その後、市民運動による留学生支援の快挙は「日中医学協会」を動かし、同協会の石館理事長がこの実績をもとにして、笹川財団より資金援助を得、お蔭さまで干立志君は快適に1年間の留学生活を終えることが出来ました。

市民運動が日中医学協会の支援を引き出すことが出来た、これも国際交流における自助努力の1つといえなくもありません。このため中国医大は政府からの日本語コースの財政支援を打切られないですんだとうかがって、ほっと胸をなでおろしたものでした。

前記したように、今、全国の大学、なかんずく国立大学は未曾有の転換期に立っているといたっても過言ではありません。

この時に当り、留意すべきは、拙速に走らず、各部局、各教官の皆さんと対話を十分に重ね、理想は高く掲げてもそれが砂上の楼閣にならぬよう、現実を踏まえて、教育に係る諸問題の対処に際しても、よき父親、よき兄貴でありたいと願っております。

皆様の力強いご支援を重ねてお願いして就任のことばとさせていただきます。